
桜舞

火瀬

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

桜舞

【Zコード】

N3293A

【作者名】

火瀬

【あらすじ】

あの夜、桜は舞つた。夜に舞つ桃色に僕は魅せられ、そしてまた。
・・。

「宗さん、もう帰つちまつのかい？」

部屋を出ようとしてかけられた声に、僕は振り向いた。
部屋では相変わらず、騒がしい宴が続いている。

葉姐さんが、残念そうに僕を見ていた。

「ええ、長屋に帰つて読みたい本が有るもので。」

「やれやれ、酒よりも本とは。文士つてのも奇妙な生き物だねえ。」

心底呆れた様に、葉姐さんは嘆息する。
僕は、曖昧に笑つた。

「せつかくだ、川沿いを通つてお帰り。桜が満開で、文士にも酒を
勧めてくれるかも知れ
ないからね。」

葉姐さんは、色っぽくしなを作り、艶やかに笑つた。

外に出て、新鮮な空気を吸う。

温かい空気が肺から抜け、身体の温度が下がつていく。

宴といつのは、騒がし過ぎていけない。

特に、僕の様な内向的な者には。

ひとつ、ため息を吐いて、歩きだす。

夜の空に舞う、桃色の花弁。

圧倒的な闇に、呑まれる事無く、存在を主張している。

「これは……見事だな」

思わず、呟く。

風は緩やかに桃色を翔ばし、川は静かに流れている。
僕は暫らく幻想的な景色に見入っていた。

「何をなさっているのです？」

何処からか、声がした。

はかなく、涼やかな女性の声。

あわてて辺りを見回しても、人の気配は無い。

まさか、桜が？

よくよく目を凝らして桜を見ると、花弁の向こうに美しい黒髪が見えた。

「驚かせてしまつた様で……申し訳御座いません。」

女性は、一步踏み出した。

その姿は、まるで桜から生まれ出でた様に美しい。

透き通るよう、真っ白な肌。

紅をさした様に赤い唇。

ほんのりと桜色に染まつた頬。

恥ずかしそうに目を伏せている姿がいじらしい。
僕は無理矢理平静さを装つた。

「ああ……いいえ。ただ、桜眺めていたのです。……あなたは、
何故此処に？」

彼女は笑つた。
魅力的な笑顔で。

「貴方に一日お会いする為です、宗様。」

訝しげに思う間もなく、彼女が僕の中に飛び込んで来た。
桜の匂いがする。

彼女の身体は、小柄な僕が抱き締められる程、小さかつた。
「私は、貴方の事を一番に想つています。私には、貴方様しか居り
ません。だから……」

小さな、小さな手が、頬に触れた。
ひんやりと、冷たい。

「私以外の方を、選ばないで下さいね。」

ざあ、と桜が揺れる。

彼女は素早く僕から離れ、微笑んだ。

「それでは、又。」

彼女の言葉が、聞こえたと同時に。

突風が吹き抜けた。

桜吹雪が止んだ、そこにはもう。

僕は翌日、葉姉さんの所を訪れた。

「おや、眼が赤いね。大方寝ずに本でも読んでたんだりう？」

意地悪そうに笑う姉さんに、僕は苦笑いを返す。

「まあ、そんな気分には違いないですよ。それで、今日は何の御用です？」

「宗さんについて、酒屋の親父が縁談を持つて來たのさ。アンタはこういうの嫌いだからって断つたんだけど、無理に写真を置いていってね。」

小さな予感。

写真を受け取り、開く。

全てを見通した様に、彼女が笑っていた。

『又、念えたでしゃうね。』

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3293a/>

桜舞

2011年1月19日01時56分発行